© オペレーションズ・リサーチ

60 巻記念号

学会機関誌 60 巻

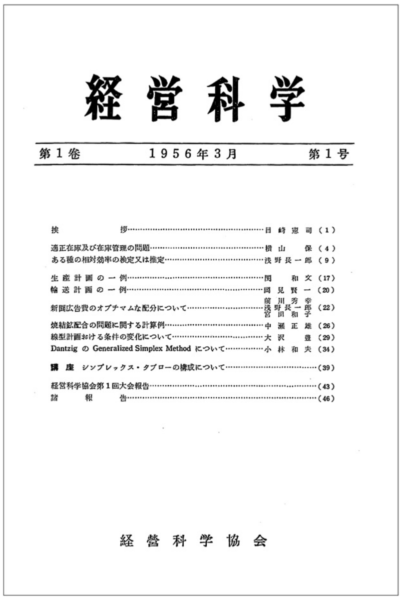
編集委員長　池上　敦子

新年明けましておめでとうございます.

OR 学会機関誌「オペレーションズ・リサーチ」が今号で 60 巻になります.

1 巻 1 号が発行されたのは 1956 年 3 月，関西の研究者が組織していた経営科学協会からの発行で，誌名は「経営科学」でした（図 1）. その後，1957 年 6 月に OR 学会が設立され，同年 9 月に発行された 2 巻 1 号には，学会の設立総会や会則に関する内容が含まれています. 設立においては，関東のグループと関西のグループが一つになり，学会組織としてスタートしたため学会名を「日本オペレーションズ・リサーチ学会」，学会誌名を「経営科学」とした経緯があるそうです.

2 巻 1 号に掲載された「学会誌の発刊に当たって」は，当時の編集委員長，近藤次郎先生が執筆されたのではないかと推察されます. 以下に再掲しますが，OR は「極度に専門化された科学や技術より得られる諸成果を一つの目的に対して最も効果的に利用するための方法を決定する学問である」と定義され，「新しい科学の誕生」という言葉にも関連づけられています. 読むと，学会立ち上げの熱い思いが伝染しそうです.



経 営 科 学

第 1 巻　　1 9 5 6 年 3 月　　第 1 号

挨拶……目崎憲司（1）
適正在庫及び在庫管理の問題……横山保（4）
ある種の相対効率の検定又は推定……浅野長一郎（9）
生産計画の一例……関和文（17）
輸送計画の一例……岡見賢一（20）
新聞広告費のオプチマムな配分について……前川秀幸　浅野長一郎　宮田和子（22）
焼結鉱配合の問題に関する計算例……中瀬正雄（26）
線型計画おける条件の変化について……大沢豊（29）
Dantzig の Generalized Simplex Method について……小林和夫（34）
講座　シンプレックス・タブローの構成について……（39）
経営科学協会第 1 回大会報告……（43）
諸報告……（46）

経 営 科 学 協 会

図 1　経営科学 1 巻 1 号

学会誌の発刊に当たって（1957 年 2 巻 1 号）

オペレーションズ・リサーチも一つの科学である. 行動決定の科学ともいわれる. しかし従来の科学と非常に異なる点は，個々の物体とか，個々の事象についての研究よりもむしろ体系全体，組織全体の関係に注目することである. 複雑な社会現象，人間関係，生産過程，等の中に何らかの規則性を見つけようとする. そしてこれを管理する. 何らかの行動決定に関係する事項を取扱うという点に一つの特徴をもつ.

科学や技術はその進歩発達に伴って特殊な専門に分化した. この傾向は 20 世紀前半において特に顕著である. 高度に発達した学問の最先端に到達するためにはある程度の専門化は止むをえないが，その結果としての孤立化は学問自身のためにも決して好ましい現象ではない. この故に科学や技術の多くの専門分野の共通の領域の開発が提唱されるに到った. 科学と工学，工学と経済学との距離は近年ますます遠ざかる傾向が認められる. この間隙を埋め，そこに新しい領域を見出して行く新しい科学の誕生こそわれわれが待望んでいたものである.

オペレーションズ・リサーチは元来このような空間に発生した新しい学問である. この学問は科学と技術，技術と経営の相互依存の関係を深め，あわせてそれぞれ専門の分野の発達にも寄与せんとするものである. すなわちそれは一つの境界領域の科学として発展したものであり，しかも組織的活動をするに際しての行動決定の科学的基礎を提供するという意味で，実践とは常に表裏の関係にある. オペレーションズ・リサーチはそのような一貫した考え方を基調として，極度に専門化された科学や技術より得られる諸成果を一つの目的に対して最も効果的に利用するための方法を決定する学問である. この故にオペレーションズ・リサーチは単に戦争における用兵の術に止らず，広く官民の経営，企業また学問研究の全般にわたって利用されるべき性質のものであるということができる.　（次ページにつづく）

 Copyright © by ORSJ. Unauthorized reproduction of this article is prohibited.

学会誌の発刊に当たって（つづき）

日本のオペレーションズ・リサーチ学会は各方面の異なった分野の専門家や研究者，あるいは官民の各種の団体や企業体に所属する実際家に対して研究発表や情報交換の共通の場を提供すると共に海外研究団体との連絡のためのわが国の代表機関として，1957 年 4 月およそ 200 名の発起人によって準備され，同年 6 月に設立を見た．オペレーションズ・リサーチは実践の上にのみ成立ちうるものであって，単なる象牙の塔式の研究態度は無意味に近い．協同研究はオペレーションズ・リサーチ本来の研究態勢であった．この学会はそのような協同研究，話合いの研究の場が作られるために役立つ学会，直接実施者と研究者が手をつなぐ場を提供する機関でなければならない．

本学会の邦文機関紙であるこの会誌はその設立に当たり有力な母胎となった経営科学協会の機関誌「経営科学」の題名を引継ぐことにして，ここに第 1 号を公刊する運びとなった．

本誌はオペレーションズ・リサーチに関する研究の邦文の機関誌として研究者および実際家のための発表の場とすると同時に広く各方面の OR ワーカーに対して最新の知識並びに情報を速かに報告してゆきたい．現場のオペレーションズ・リサーチの仕事は，オペレーションズ・リサーチの本質であり，原動力である．しかし従来ともすれば学問という既成の範疇からは除外されようとしてきた．本誌がこういった仕事に正当な地位と権威とを与えるための機会として役立ち，また同時にオペレーションズ・リサーチの理論研究の発展に貢献するものであることを望みたい．

一方，「オペレーションズ・リサーチ」は，OR 学会機関誌とは別に，1956 年，日本科学技術連盟により OR の商業月刊雑誌として出版されました．OR 学会誌「経営科学」と商業雑誌「オペレーションズ・リサーチ」は，ともに 1956 年生まれですが，誕生 20 年後の 1976 年 1 月，OR 学会が「オペレーションズ・リサーチ」の編集・発行を日本科学技術連盟より引継ぎ，OR 学会の機関誌としました（同時に「経営科学」が 19 巻をもって廃刊になりました）．

確かに，「オペレーションズ・リサーチ」20 巻と 21 巻の表紙を比べると，20 巻の英名が Operations Research as a Management Scinece だったのに対し，21 巻では，現在の Communications of the Operations Research Society of Japan になっています．表紙の一番下に示してある発行者も，日本科学技術連盟から社団法人日本オペレーションズ・リサーチ学会に変更されています（現在は，社団法人ではなく，公益社団法人です）．

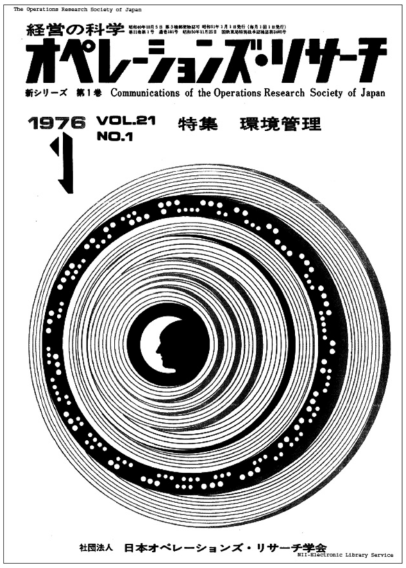


図 2　「オペレーションズ・リサーチ」21 巻 1 号

さて，これまでの学会機関誌の特集記事のタイトルをすべて印刷して眺めてみました（A4 版両面印刷で 15 ミリくらいの厚さです）．そのときどきの編集委員会の特徴も感じられ非常に興味深いです．そして，「経営科学」だった 1 巻から，この 60 巻に至るまでの様々な特集の中で「どうしても読んでみたい」という記事がたくさんあり，印刷した厚さ 15 ミリの用紙の束は，たちまち付箋でにぎやかになりました．結局，つまみ読みをするのですが，今読んでも面白い記事というのは，執筆者がご自身にとってのホットな内容を，非常に楽しんで書いてくださっていたからなのだと感じました．

学会機関誌としての「オペレーションズ・リサーチ」は，1976 年の 1 号からということは先ほど紹介しましたが，この号には，編集委員長の編集方針が掲げられています．学会機関誌としての「オペレーションズ・リサーチ」の意味や価値を認識することができます．60 巻を機に，ますます「オペレーションズ・リサーチ」が，OR の活躍をサポートできるよう，当時の編集委員長であられた森村英典先生の「本誌の編集方針について」もここで再掲させていただきます．

Copyright © by ORSJ. Unauthorized reproduction of this article is prohibited.

本誌の編集方針について（1976 年 1 月号）

編集委員長　森村 英典

当学会では 2 種類の定期刊行物を発行することになりました．1 つは論文誌でもう 1 つが本誌です．前者は申すまでもなく学会員のオリジナルな研究論文を発表するためのもので，論文誌を厚くするつまり学会員の研究活動を活発にすることは学会としての大きな責任ですがそれだけで万事が終わるわけではありません．

実務に役立てることを第一の目的として学会に加入している会員には，個々の先端的な研究結果よりも，それぞれの分野における基本的な知識，基本的な観点が容易に吸収できるような態勢が望まれているようです．OR の理論研究を志す会員にとっても，案務における適用を無視してその研究が進むとも思えません．こういった事情から，いわば 2 次情報を整備して提供する雑誌が必要になります．本誌を，1 次情報専門の論文誌と明確に分けたのは，このような背景を考えた結果です．

したがって，本誌の編集方針は，学会の内外から広く寄稿をいただき，OR の活躍が期待される各分野ごとに問題点や実例を探り，その分野で OR 活動を志す方の基本文献でありうるような記事をできるだけ豊富に盛り込むことがその第一です．

また，本誌が当学会の機関誌であることを考えれば当然のことですが，各種の学会活動の要としての役割を果たさなくてはなりません．学会のことなら何でも分かるという雑誌になっている必要があるでしょうし，さらには本誌を読むことで，学会をより身近なものと感じていただけるものにしたいと考えております．

また，学会外のかたがたにもできるだけたくさん読んでいただき，わが国の OR 活動そのものを広げることにも役立たせたいと念願しております．

編集委員会では「親しみやすく，役に立つ雑誌」というモットーのもとに，さまざまの企画を立てました．この中に充実した内容を盛り込むにはどうしても皆さまのご援助が必要です．ぜひご協力を賜わりまようお願いいたします．

現編集委員会も「親しみやすく，役に立つ雑誌」を目指し，毎号，全力かつ楽しんで企画させていただいているしだいです．

機関誌の強みは，毎月読者に送られてくることです．魅力的な特集であれば，多くの方が手にして読んでくださるのです．編集委員会では「編集委員本人が，ぜひ読みたいものにする」「何度も読みたいものにする」「チュートリアル的な特集は，その分野を勉強したいと思っている人の教科書として使えるものにする」「流行だというだけの特集は組まない」といった意見をかわしています．また，オーガナイザ，執筆者の方々には多大なお力をいただき，魅力ある特集になるよう編集委員会もお手伝いさせていただいています．

編集委員会では 1 年前くらいから，本号（60 巻記念号）を発行するにあたり「素晴らしい特集を組もう」と盛り上がっていました．そして，オーガナイザの松井知己先生と素晴らしい執筆者の先生方のおかげで，その思いを達成する特集が完成しました．さて，その企画を進めているときに，編集委員会で，表紙に「60 巻おめでとう」という言葉を入れようという話が出ました．そして，理事会を経由し「新しいデザインの表紙にする」という話にまで発展してしまいました．

本号から表紙が新しくなったことはすでにお気づきと思います．これに対し，21 巻以降の機関誌の表紙のデザインは，大きく 7 種類のものがありましたので，これを機にこれらを並べてみることにしました．図 2 に加え，それぞれが新しく登場したときの号の表紙を図 3 と図 4 に紹介します．みなさんそれぞれにとって懐かしいデザインがあるのではないでしょうか．

新しい表紙について，編集委員会では，「知的でシンプル」をテーマに掲げてデザインを検討してきました．我々のリクエストにこたえて実際にデザインして下さったのは池田宏史さん（大阪市立大学特別研究員）です．池田さんは出版のお仕事にも関わってこられたこともあり，素敵な案をたくさん作ってくださいました．有料の画像を含んだものは残念ながらご紹介できないのですが，それ以外の一部を図 5 と図 6 にご紹介したいと思います．図 5 のデザインは，最終候補 2 つのうちの 1 つです．洗練された素敵なデザインだと思います[1]．図 7 は，デザイン検討の際に編集委員が作成した案です．上のデザインは（色をお見せできなくて残念ですが），ビビッドなイメージにしようとして作成されたものであり，下のデザインは，フィボナチ数列がならんでいるだけのデザインです．1 つの表紙に決めるのは大変な作業ではありましたが，楽しみながら進めさせていただきました．みなさんが新しい表紙を気に入ってくださることを願っています．

[1] 本号の特集を企画していた頃でしたので，タイトルや記事の順序が微妙に異なっています．

 Copyright © by ORSJ. Unauthorized reproduction of this article is prohibited.

図 3　22 巻 1 号，23 巻 1 号，32 巻 1 号

図 4　39 巻 1 号，44 巻 1 号，54 巻 1 号

Copyright © by ORSJ. Unauthorized reproduction of this article is prohibited.

図 5　最終候補の 1 つ

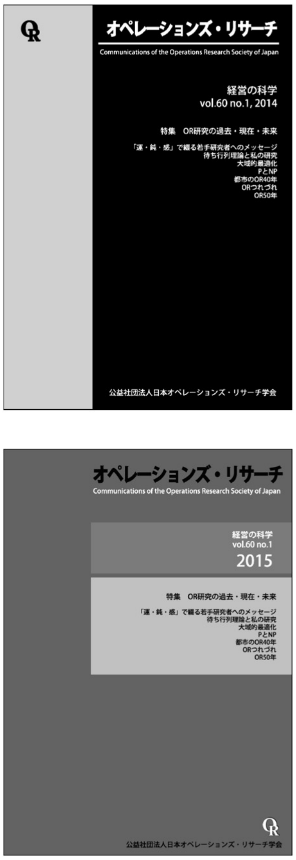


図 6　その他のデザイン案 1，2

図 7　その他のデザイン案 3，4

最後になりましたが，森村英典先生には，「オペレーションズ・リサーチ」21 巻 1 号の「本誌の編集方針について」の再掲について快くご了解をいただきました．そして，大阪大学の三道弘明先生には，学会機関誌の 1 巻の発行ならびに OR 学会設立の経緯について，いろいろ教えていただきました．いただいた情報を基に，OR 事典等を調べ，OR 学会機関誌の 60 年間を追うことができました．また，新しい表紙をデザインくださった池田宏史さんには，編集委員会から多くのお願いをしましたが，とても素敵なデザインをしていただきました．編集委員会一同，御礼を申し上げるとともに，心より感謝いたします．

なお，図 2，図 3，図 4 に紹介した表紙の画像は（23 巻 1 号の表紙以外のものは），国立情報学研究所 CiNii が，http://ci.nii.ac.jp/vol_issue/nels/AN00364999_ja.html で公開している画像を利用させていただきました．

 Copyright © by ORSJ. Unauthorized reproduction of this article is prohibited.